

	質問内容	回答
1	<p>ILCは、素粒子である電子と陽電子をビームにしてぶっつけ、それから生じる粒子等を観測して様々な仮説を検証するものと思いますが、標準理論では、素粒子は、その大きさが無い点としています。</p> <p>そもそも大きさが無い粒子同士をぶっつけることは可能なのでしょうか？</p> <p>既に、電子と陽電子をぶっつける観測装置があるそうなので、ぶつかるのでしょうか、ということは、ビームの密度とぶつかる個数から、素粒子の大きさが逆算できるのではないのでしょうか？</p>	<p>電子や陽電子は、点であると同時に波でもある(量子)ため広がっています。</p> <p>広がりを持つ電子の波と陽電子の波が重なることで反応が起こります。</p> <p>ですので、大きさは関係ありません。</p> <p>例えば、地球と月の間に引力があるように離れた点の間でも反応します。</p> <p>同様のしくみで、電子と陽電子の間でも(標準理論の仕組みで)起こるのです。</p> <p>反応は近いほど起こりやすく、できるだけ近くにするために小さい空間(塊)に閉じ込めて正面衝突させます。</p>
2	<p>9/9の新聞等に「KEKが文部科学省ロードマップの申請書類取り下げの理由として、国際協力による計画推進体制(学术界)に進展があったため」という記事が掲載された。</p> <p>今回の取り下げは学術面からの判断だったと思うが、国が意思決定をする際、日本学術会議マスタープラン、文部科学省ロードマップに登載するというプロセスが必要であるとされてきた中で、取り下げをしたことは、(政治的にみて)国の誘致判断に影響を及ぼすのか、あるいは及ぼさないのかお聞きしたい。また、その理由についてもお聞きしたい。</p>	<p>政府の判断に関することであり、当協議会としてコメントすることは差し控えます。</p> <p>なお、森先生の講義で9月11日の萩生田文部科学大臣の記者会見の内容が説明されています。「申請の取り下げ理由は、本年2月にILCに関する国際会議での声明において、ILCに関する国際協体制などの推進の枠組みを再構築することとなり、その内容を踏まえ、申請内容を見直す必要が生じたためだと伺っております。文科省としては、米欧の政府機関との意見交換を行いつつ、国際研究者コミュニティによる議論を注視してまいりたいと思っている。」とコメントされています。</p>
3	<p>9月9日付け岩手日報紙はKEKが文科省の学術研究大型プロジェクト基本構想申請を取り下げたと報じています。今後のご予定はどうなるのでしょうか？</p>	<p>ご講演いただいた通り、計画を推進するための国際組織が立ち上がり、東北ILC事業推進センターが設立されました。我々としては、引き続きこの動きを進めるように支援していきたいと考えています。</p>
4	<p>コロナ渦もあり分断する現代社会で連帯を目指す地球村のビジョン、良いと思いました。平泉の浄土思想、里山文化の下で地球村が実現すれば素晴らしいと思います。このビジョンを今回の講演会で取り上げたということは、ILC推進側では提案されたビジョンの実現を目指すということでしょうか。また、ビジョンを実現するために、地域はどのように行動するのでしょうか。</p>	<p>地球村創生ビジョンは、総論に当たる第1部「地球村創生ビジョン編」に加え、第2部「ILCを契機とした地球村創生編」としてILCを契機とした地球村創生の課題、目指す姿、取組の方向なども提言されています。</p> <p>その内容は、これまで東北地域において取り組まれてきた多文化共生、グリーンILCなどと軌を一にするものと捉えており、今後東北としてILCを契機としたまちづくりや地域振興に取り組む場合、「地球村創生ビジョン」を上位概念として「ILCを契機とした地球村創生」に取り組んでいきます。</p> <p>具体的には、今般、岩手県国際リニアコライダー推進協議会も参加する東北ILC事業推進センターが設立されましたが、まちづくり等を検討するに当たって、「地球村創生ビジョン」を念頭に置き、ビジョンを具体化する活動とすることとしております。</p>